

日本バスケットボール協会が コーチに求める人間力

序言

「人間力とは何か」。これは古くて、新しい問いかもしれません。まずそれは人間が人間として持ちうる「卓越性 (excellence)」や「美德 (virtue)」と言い換えることができると思われれます。この卓越性や美德はそれ自体で価値のあるものであり、人として善く生きるために欠かすことができないものと言えます。では、コーチにとっては、具体的にどのような卓越性や美德が求められるでしょうか。それは、コーチの本質的な役割とバスケットボールの本質的な特徴から自ずと浮かび上がってくるものと言えるでしょう。

例えば、プレーヤーなくしてコーチがコーチであることができないことを考えれば、コーチにとってはプレーヤーと良好な関係を気づくための人柄という意味での「人間力」を欠かすことができません。また、この情報が溢れる現代社会において何よりもコーチに求められるのは、個別的な状況を考慮に入れ、その場で求められる適切な知識を見分け、その知識を的確に活用することです。そのためにも「人間力」は求められるでしょう。その一方で、面白い、真面目、明るい、優しい、寡黙などといった性格のよさもそれぞれのコーチの個性に関するものという意味で必ずしも全員に一律で求められるものには含まれないと考えられます。また、コーチに必要なだとよく言われる「情熱」は、たしかにコーチングにおいて重要なものですが、「人間力」のなかから生じてくるもの、あるいは「人間力」によって活かされるものと考えれば、「人間力」のなかには含まれないと言ったほうがいいでしょう。情熱そのものは卓越性や美德とは言えないからです。

そうすると、次のような「人間力」がどのようなコーチにとっても求められることになると思われれます。そうした「人間力」を発揮するところに、コーチとしてのウェルビーイングがあり、コーチとしての喜びも生じてくるでしょう。

正しい知識を見極めるための「思慮深さ」

コーチにとって、バスケットボールの専門的知識が必要なことは言うまでもありません。それなくして練習での適切な指導や試合での的確な指揮はありえないという意味で、プレーヤーの競技力向上や発揮には欠かすことができません。コーチは、JBAの指導者養成講習会やその他クリニックや勉強会などでたくさんの知識に出会い、それらを取り入れることができます。もちろん、それだけに限らず、常に向上心を持ち、感性を失わず、オープンマインドであり続けるのであれば、本当にさまざまな場面で知識に触れることができるでしょう。しかし、その知識は本当に間違いのないものでしょうか。真新しい情報に妄信的に飛びつくのではなく、自分自身の頭で考え、他のコーチたちとも話し合い、これまでの経験や参考資料などの情報とも照らし合わせ、適切な知識を「思慮深く」見極めることが大切です。

知識を適切に活用するための「賢慮」

バスケットボールのコーチングでは、知識を持っているだけでは十分ではありません。コーチにとって知識は、適切な場面で活用することができなければならないのです。そのためには、自分と他者（特にチーム内の他のコーチたち、プレーヤー、スタッフなど）のことを知り、そして自分の置かれた状況を正確に把握し、そのうえでその場で求められる適切な知識を活用することができなければなりません。これは言い換えれば、「柔軟性を持つこと」や「臨機応変に対応すること」とも言えるでしょう。また、この賢慮は、バスケットボールのコート内だけにとどまらず、それ以外の場面でも生きてきます。知識というものは、バスケットボールの専門的知識に限らず、さまざまな知識があるからです。それらは、場面ごとにコーチがどのように行動すればよいのかを考えるうえで、出発点になります。例えばウェルビーイングに関する知識を持っているだけでは十分ではなく、それをプレーヤーと自身が活動するなかで上手く活用しなければなりません。だからこそ、コーチにとっては、単なる静的な知識にとどまらず、そうした知識を上手く活かすための動的な知として「賢慮」が必要になります。

適切な場面で臆することなく判断を下すための「勇気」

常に対戦相手のいるバスケットボールという競技において、プレッシャーのかかる緊迫した場面で臆することなく、自分の思い描いた行動を取るためには「勇気」が必要になります。不思議なもので、恐れや心配を生じさせるような緊迫した場面でも「勇気」を出して一步を踏み出すことで、私たちは本当の意味での勇気を手にすることができるようになります。反対に、同じような場面で怖気づき、決断を下さなければ、その次の機会に一步を踏み出すことはよりいっそう困難になってしまうものです。勇気を出した自分の姿を想像して、一步を踏み出してみてください。

プレイヤーの挑戦と主体性を受け入れる「寛容」

バスケットボールの試合において自分とチームの真価を発揮できるような場面がいつもやってくるわけではありません。その機会がやってくるまで、忍耐強く練習に励み、自分たちの能力を最大限に向上させることが大切です。また、練習の場でもさまざまな出来事が起こる可能性があり、いつも計画通りにいくわけではありません。プレイヤーの主体性や自主性を尊重すれば、コーチとしての自分の意図とは異なる行動が現れることもあるでしょうし、プレイヤーが自分自身で考え、成長していく過程では、さまざまな失敗やミスを経験することでしょう。もちろん、ときには厳しく接することが必要な場面もありますが、できる限りプレイヤーの挑戦を辛抱強く見守り、プレイヤーと一緒に向上していくためには「寛容」の精神が必要になります。



相手の気持ちや考え方に配慮する「思いやり」

自明のことですが、コーチは機械を相手にしているわけではありません。喜びを感じ、痛みを感じる人間と活動を共にしています。そのなかでは、相手のことを自分のことのように考えることができる「思いやり」が大切です。コーチは自分ひとりでは「コーチ」にはなれません。プレーヤーがいるからこそ、「コーチ」になることができるのです。そのことを常々忘れてはなりません。そして、「思いやり」は何も自分のプレーヤーたちだけではなく、活動を共にする同僚のコーチたち、さまざまな助力を与えてくれるプレーヤーの保護者や家族、支援をしてくれるチームの関係者は当然のことながら、試合をしている対戦相手、試合の審判、オフィシャル、観客までにも及ぶものです。そして、この「思いやり」は、人の意見に耳を傾けること、そして共感することから始まることを忘れてはならないでしょう。そこから他者に対する「尊重」や「敬意」も生じてくるのです。

人々に正直に向き合い、物事に真摯に取り組む「誠実」

バスケットボールという競技を通じてコーチはさまざまな人々、さまざまな事柄に出会います。そうした中であって、どれほど大きな志を持っていても、誠実に取り組まなければ、人々と信頼関係を築くことはできません。自分自身を信じてくれる人々に対して私利私欲を交えず、真実を偽ることなく、真心をもって正直に接するとき、そこにその人の誠実さが現れます。また、バスケットボールという競技に誠実に取り組むからこそ、プレーヤーたちや自分自身を心から誇りに思うことができます。この「誠実」は、いわゆる「インテグリティ」にあたるものです。もちろん、最初は誠実にあることは簡単なことではないかもしれませんが、しかし、誠実に行動し続けることで、段々と、誠実さが自分のなかにより確固としたものとして根づいていくでしょう。その誠実さは、プレーヤーをはじめとする、周りの人たちにもきっと伝わっていくはずで

より善いものを目指す原動力となる「探究心」

バスケットボールは奥深い競技です。コーチングの実践においては常により善い状態を目指して改善することが求められますが、コーチを改善へと導くのは「探究心」です。また、自分がまだ知らないことを知ろうとすることや、知っていることでもそれをさらに掘り下げて考えることは、まさにこの「探究心」がコーチを動かしています。その意味で、この探究心はコーチの活動を支える原動力と言えるでしょう。コーチとしてはいついかなるときでも探究心を持ち続け、自分たち自身が活躍する姿にワクワクすることも大切です。

自分が属する共同体、 接する人々の間で共生するための「規範意識」

規範は私たちが行為するうえで導き手となるものですが、この規範にはさまざまなものが含まれます。国や社会の一員として生きていく上で、絶対に守らなければならない倫理として、例えば、国の法令や地方自治体の条例などに加えて、組織や団体や学校の規則があります。さらに、お互いにより善く生きていくために、社会のなかには道徳があり、チームにはスタンダードやルールがあり、人々のなかには慣習や伝統やマナーなどがあり、私たちはそれらを尊重して生きていくことが求められます。また国際的な活動をする場合には、国際法や現地での法律を遵守することも欠かすことができません。JBAでも「バスケットボールコーチの行動規範」を定めています。こうしたさまざまな規範を自律的に守ること、つまり規範意識を持ちつつ主体的に行動することで、私たちは人間として道を踏み外すことなく、より善い活動をしていくことができるでしょう。コーチとしては、自分が規範に従って行動するのはもちろんのこと、プレーヤーやその他のスタッフにとってのお手本となり、規範を守ることを体現することも大切です。

